

には、鹿児島市街化区域内の地価が他県にくらべ、非常に高いこと、市内大型団地の形成がほぼ終了していることなどの背景がある。

しかし、市街地から遠隔地である半面、妙円寺団地の分譲が県住宅供給公社の事業であり、また将来は一つの新しい「大きな町（ちょう）」に匹敵するほどの大団地となる等、財団の志向する意図を十分發揮できる「ゆとり」があるという利点もあった。



妙円寺住宅祭によせて

南日本放送常務取締役 桐原 久

衣、食、住の確保ということは、人間が生きて行く上で満たさねばならぬ最低の条件である。戦後の瓦礫の荒廃の中から食べ物と衣類を並べた闇市と、バラックの住居が先ず一番はじめに芽を吹いた。

あれから三十五年、日本は完全に先進国の仲間入りをし食べ物も着る物も欧米先進国以上に贅沢になって来た。ただ、うさぎ小屋云々に象徴される住宅を除いては。

しかし、このことは衣と食の方の進

立案せねばならず、ワンパターンでは動きがとれないことを教えてくれたようである。

さて、開幕以来（九月二十日現在）見学者および申込者の数はきわめて順調に伸び、参観者の評価もますますのようだ。住宅に思想を盛り込むまでには、まだかなりの「とき」を要するだろうが、街並みとコミュニケーションの思想を展示した妙円寺住宅祭は、過去の展示会的住宅祭と違った印象を、参観者に与えているのは確実である。

み具合が早過ぎたと見るべきなのである。戦前の日本人だって、サラリーマンは停年退職になってはじめてわが家を持つたので、今日のように三十才台でわが家をといた思想は無かった。アメリカにしても新婚時代、子供の成長期、老後とその時々々のライフスタイルに合わせたアパートなり一戸建てなりの家に移り住み一軒の持ち家にしたがみっこうという思想は無い。

日本でも戦前は、サラリーマンは停年までは借屋住まいが普通であったの

が、今日、三十才台にして我が家を手に入れようと思う様になったのは次の四つの理由からであると私は考える。

- (1) 高度成長に伴う社会構造の変化により、人口の都市集中化がすすみ都市部における住宅難が深刻になり貸家が見当らなくなったことと、あつても家賃が高過ぎること。
- (2) 所得の増大により、三十才台のサラリーマンでもマイホームの入手が夢でなくなったこと。
- (3) 一次産業の衰退と二次、三次産業の興隆に伴ない、農耕民族としての土地に対する執着意識が耕地の確保から住居地の確保へと変化して来たこと。
- (4) 企業としての住宅産業の興隆発達マイホームを求めるユーザーにとつてマスコミとメーカーを結ぶ調整役としての住宅生産振興財団の設置はまさに時宜に適したものと見えよう。南日本放送では、今までも住宅展を何回か手がけて来たが、今回の妙円寺住宅祭もその主催者の一員として参画出来たことを嬉しく思っている。由緒ある妙円寺団地の町づくりが、この住宅祭を契機として大きく花開くことを祈って止まない。

われわれとしては、庶民の夢が現実のものとなる様、ラジオ、テレビで問いかけて来たし今後も微力を尽して行きたいと念じている。住のバランスを恢復し、人びとの夢を満たすために。

妙円寺住宅祭 事務局日誌

昭和54年12月

・鹿児島県住宅供給公社に対し、伊集院妙円寺団地で住宅祭を開催したい旨文書で申し入れ、2条件を付けて承諾された。2条件とは――

- a 公社法にのっとり、本事業は公社の昭和55年度事業として行う
- b 県民重視の住宅行政から低廉良質の住宅供給に寄与すること

昭和55年1月

- ・準備委員会（仮称）で住宅祭企画書（案）を検討、作成する。
- ・準備委員会（仮称）で組織を検討し準備委員会事務局を鹿児島市新屋敷町公社ビル2階に設置する。また正式名称も決定する。

2月

- ・主催者を決定。伊集院妙円寺団地住宅祭準備委員会等の組織を正式に発足させ、地元メーカーも正式に参加。
- ・設計分科会において、街並みづくりについて、手法・原則を検討する。

3月

- ・準備委員会が広報計画・工程見学会の内容スケジュールを検討。
- ・15日、城山観光ホテルで、街並み及び住宅の設計意図の発表会を行う。
- ・準備委員会において、工程見学会の